「縁」
（Enishi)

犬猫用　銀イオン水

ペットも大切な家族の一員

家庭でもできるペットの病気予防

愛するペットにはいつまでも健康で長生きをしてほしい。飼い主さんなら誰でもそう願うでしょう。健康の秘訣というのは何か特別なことをしたり、高い薬を飲んだりすることではありません。私たち人間で考えてみても、病気をせずに長生きするためのコツは、実は難しいことではなく、普通の事を毎日続けることが大切だったりします。ペットも同じで、毎日私たちがどのようにペットを過ごさせてあげるかがとても重要になります。

「菌」や「ウイルス」から大切なペットを守ることが大切です。

細菌性腸炎の病態と症状

犬の細菌性腸炎とは、細菌によって腸炎が引き起こされた状態を示す広い概念です。

代表的な細菌はサルモネラ菌、クロストリジウム菌、カンピロバクター菌、スピロヘータ、大腸菌、プロテウス菌、緑濃菌などです。中でも犬の腸炎を引き起こす原因菌として重要なのは、サルモネラ菌とカンピロバクター菌だと言われています。

細菌性腸炎の主症状

★下痢（軟便・水様便・血便）

★食欲不振

★腹痛（触ると痛がったり、背中を丸めている）

★脱水症状（下痢による体液の喪失）

サルモネラ菌は小腸に定着して細胞内に侵入し、腸間膜のリンパ節で増殖しながらエンテロトキシンと呼ばれる毒素を産生します。腸炎を引き起こす主犯格はこの毒素です。またカメ、ヘビ、トカゲといった爬虫類が高率で保菌していることでも知られており、2005年に行われた調査によると、ペット用爬虫類のうちこの菌を保有していた割合は、家庭内飼育で32.2%、ペットショップで80.0%、輸入直後で56.0%だったそうです。一方、カンピロバクターもありふれた菌で、下痢をしていない犬の49%、正常な猫の45%程度が保有し、日常的に糞中に排泄していると考えられています。

犬の細菌性腸炎の症状は、原因菌の種類や感染部位によってまちまちですが、おおむね以下です。発症する犬のほとんどは、免疫力の弱い6ヶ月齢未満の子犬、妊娠中のメス犬、そして生肉を与えられる機会の多いレース犬やそり犬です。

イヌ伝染性肝炎の病態と症状

犬のイヌ伝染性肝炎とは、アデノウイルス科に属する**イヌアデノウイルス1型**によって引き起こされる感染症です。

特に1歳以下の犬において致死率が高く、成犬では不顕性感染（ふけんせいかんせん＝ウイルスに感染しているけれども症状が出ない状態）を示すことが多いという特徴があります。

犬のイヌ伝染性肝炎の症状は一定していません。以下では、よくあるパターンごとに分類して表記します。

イヌ伝染性肝炎の主症状

突然致死型

突然致死型（とつぜんちしがた）では、数時間前までは元気に過ごしていた子犬が急に腹痛をおこし12時間～24時間以内に死亡します。

不顕性型

不顕性型（ふけんせいがた）は、感染しているにもかかわらず、何の症状も見せない状態のことです。免疫力が正常な成犬の多くはこのパターンを示します。

軽症型

軽症型では食欲不振・鼻水・発熱（39℃）など軽微な症状を示します。

イヌ伝染性肝炎の原因

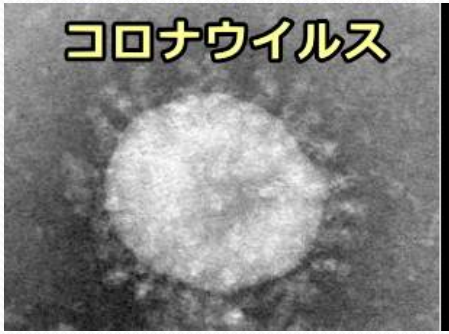
犬のイヌ伝染性肝炎の原因としては、主に以下のようなものが考えられます。予防できそうなものは飼い主の側であらかじめ原因を取り除いておきましょう。

ウイルスとの接触

発病中の、もしくは体内にウイルスを保有している犬の唾液や尿、汚染された食器や衣類などを犬が舐めることによって感染します。ウイルスは伝染性が非常に強く、回復した犬でも数ヶ月に渡って尿中にウイルスを含んでいるといいますので要注意です。

コロナウイルス性腸炎の病態と症状

犬のコロナウイルス性腸炎とは、**イヌコロナウイルス**（Canine coronavirus, CCV）によって引き起こされる感染症です。



コロナウイルス性腸炎の主症状

★元気が無くなる

★食欲不振

★下痢（黄緑～オレンジ色で悪臭が強い）

★嘔吐

★死亡（パルボウイルスとの合併で）

コロナウイルスとはニドウイルス目のコロナウイルス科のウイルスを指し、エンベロープ（ウイルスの外膜）表面に存在する突起が、あたかも太陽から突き出す炎の柱、通称「コロナ」を思わせることからこの名がつきました。犬に感染するイヌコロナウイルスは、犬の小腸上部2/3とその周辺のリンパ節をとりわけ好む感染性の強いウイルスです。イヌ科動物全般のほか、猫にも感染することが確認されていますが、猫の場合は何の症状も示しません。

犬のコロナウイルス性腸炎の症状としては以下のようなものが挙げられます。なお、成犬の場合は、感染しても症状を示さない「不顕性感染」（ふけんせいかんせん）がほとんどです。以下では、免疫力の弱い子犬が発症した場合の症状を示します。

ウイルスとの接触

コロナウイルスに感染した他のイヌの便や嘔吐物などを口にすることで感染します。また、ウイルスの付着した人間の手や食器を介しても伝播します。

ストレス

ストレスによる免疫力の低下があると、通常は無症状の成犬でも症状を示すことがあります。具体的にはドッグショーへの参加、新しい犬と先住犬とのいがみ合い、密集飼育（ホーディング）、不衛生な飼育環境などです。

ジステンパーの病態と症状

犬のジステンパーとは、全世界に存在している**犬ジステンパーウイルス**（CDV）に感染することによって発症する感染症です。

ニホンオオカミの絶滅の原因となった疾患（しっかん）として有名で、現在でもイヌの重要な感染症の1つに数えられています。イヌ科動物に対して高い感染性がありますが、ネコ科、イタチ科、アライグマ科、スカンク科、アザラシ科、ジャコウネコ科など、ほとんどの食肉目（しょくにくもく）の動物に感染します。2014年の末から2015年の初頭にかけ、中国陝西省の研究施設で飼育されていたジャイアントパンダが、ジステンパーに感染して次々と死んでしまった出来事は記憶に新しいでしょう。なお人間に感染することもありますが、麻疹（はしか）に対する免疫があれば症状が出ることはまずありません。

鼻、喉から侵入したウイルスは、まずマクロファージによってリンパ節に運ばれ、そこで増殖します。1週間ほどで全身のリンパ節に広がったウイルスは、その後血液に乗って呼吸器、消化器、泌尿器、生殖器に拡散し、時に中枢神経系にまで広がります。このようにして発生する犬ジステンパーの主な症状は以下です。

ジステンパーの主症状

感染から4～6日

発熱・食欲不振などかぜとよく似た症状

感染から1週間～

元気が無くなる・結膜炎・角膜炎・目やに・嘔吐・腹痛・下痢・血便・せき・くしゃみ・呼吸が荒くなる・鼻先の乾燥

重症化した場合

体のいたるところがピクピクと律動的にけいれんするチック症状、下半身麻痺、てんかん様発作（倒れて泡を吹く）、無意味な暴走など、ジステンパー性神経症状

ジステンパーの主な原因

感染動物との接触

ジステンパーウイルスに感染した他のイヌのくしゃみ飛沫（ひまつ）を吸い込んだり、感染犬に直接的・間接的に接触することで鼻や口からウイルスが体内に侵入します。また、ウイルスの付着した食器や食べ物などを介しても間接的に感染することがあります。ちなみにCDVの生存期間は、体温で1時間、それよりやや低い室温で3時間程度です。